

モリエールの宗教感情

三 木 島 彦

モリエールは、宗教に巢食う偽善や狂信を告発した喜劇『タルチュフ』において、代弁者クレアントをして、こう語らせている。

私は人から尊敬される学者ではありませんし、知恵などと言えるほどのものは、私の中にとくにありません。けれども、ひとことで言って、私の学問の全てと言え、本物と偽物を見分けることができることです。私は立派な信者ほど尊敬すべき人は知りませんし、真の熱情から発する清らかさほど高貴で美しいものは知りません。¹⁾

自然を愛し、人間性を圧殺する虚偽を憎んだモリエールは、独善的で、他人の自由をも束縛せんとする偽の熱情を否認し、温和で、思いやりのある真の宗教的熱情を称揚している。本物と偽物の区別を設けることによって、一般に美德とされている価値に対して、モリエールは問題提起を行なったのである。こうした人間本位の考え方は、多分に前世紀のルネサンス・ユマニズムの影響を蒙っているが、それはモリエールの生きた時代全体の傾向であったことも忘れてはならない。本稿では、十七世紀の人々の精神面に深い関わりを持ち、様々の道徳を形作った宗教感情を取り上げて、喜劇作家としてのモリエールの立場に考察を加えてみたい。

1. 信心に関するモリエールの主張とその是非（その一）

性格喜劇が、欠点の奴隷となり、社会性を喪失した人間を笑いの対象として

供するためには、他ならぬ喜劇作家自身が大向こうの支持を得ていることが前提となる。したがって、喜劇作家は、特定の党派に抛るものではなく、いつでも人々の「秘かな考え²⁾」を代弁してくれるものでなければならない。人々の一般的な考え方が行きつくところ、すなわち性格喜劇を支えるものは、良識である。モリエールにとって、それが本来の美德にせよ、悪徳であるにせよ、極端に走ったり、その人の意志を離れ、機械的に適用される場合、人間は滑稽なものとなり、喜劇が生まれるのである。

モリエールは、彼の喜劇におけるそのような判断の基準を宮廷の洗練された趣味から得たものと主張する。³⁾そして、「オネットム＝良識ある紳士を笑わせるというのは、並々ならぬ企てなのです。」⁴⁾と語っている。『女房学校是非』において、モリエールは、彼が宮廷の紳士（オネットム）と銘打った代弁者ドラントの口を借りて、社交界の趣味の良さと民衆の素朴さの中にある良識を彼の喜劇を支持するものとして掲げている。⁵⁾モリエールとしては、それに則って宗教の次元で真の信心と偽の信心を区別したのである。

遡れば、1659年、モリエールは、すでに『才女気どり』の上演に際し、真のプレシューズ（才女）と偽のプレシューズの区別を設けている。モリエールは、その本来の意義を知ろうともせず、ただ本物の恰好ばかりを猿真似し、悦に入っている無自覚な田舎娘を嘲笑している。だから、「自分を下手に真似する滑稽な女たちが嘲笑されている時、真のプレシューズが怒ったりするのは間違い」⁶⁾であり、そのような態度をとれば、まさに自分がその通りのものである、と認めたことになる、と主張している。エラスムスが『痴愚神礼讃』の中の諷刺の本質を語ったこの理屈は、『女房学校是非』のユラニーの台詞にもある。⁷⁾これに対して、自他共に許す偉大なプレシュー、プレシューズたちは、いかなる反応を示したのであろうか。枢機卿ジャン・カルヴェは、その著『モリエールはキリスト教徒か？』の中で、そのことに言及している。⁸⁾それによれば、メナージュ、モンソーエ公といった人々は面白かった、と認めているが、ランブイエ侯夫人やスキュデリー嬢は沈黙を守っている。そして、この同じ聴衆が、1659年11月18日、『才女気どり』初演の翌日、モリエールを憎んだ「モーの鷲」ボシュエの説教を聞きに行ったのである。

信心家にとっても、プレシューにとっても、モリエールは危険視された。

彼の中に、はっきり名指す敵でないにしても、少なくともその行動を監視すべき危険な喜劇役者を見たのである。⁹⁾

ボシュエは、「必要以上に賢ぶろうとしないように注意なさい。適度に慎しく、賢くありなさい¹⁰⁾」と教えているが、このような謙虚さや中庸の徳の勧めは、モリエールの気質に適合するものである。だが、この時代の教会は、演劇や役者を神を冒瀆するものとして嫌っており、したがって宗教の問題を他の世俗の問題と同列に芝居の中で論じること自体が受け入れられなかったのである。内容的にも、ボシュエは、モリエールを次の様に非難している。

あなたが神の御前で美德や信心がいつでも滑稽なものとなっている芝居をあえて支持するかどうかだけを考えてください。そこでは墮落は常に擁護され、常に戯れていて、羞恥心はいつでも傷つけられ、いつでもこのうえない辱めを受けることにおびやかされているのです。¹¹⁾

クレアントは、「寛容」を抛り所に、信者の中にも本物と偽物の区別を設けるべきだと主張する。だが、実際のところは、そのような弁別が各人の思想の問題に抵触するのは言うまでもない。特に十七世紀、ジェジュイットとジャンセニストが対立した宗教の問題ではなおさらのことである。このような困難さのため、モリエールがクレアントに真の信者として挙げさせる名前は、全て架空の人物のものである。¹²⁾

本物と偽物を区別することに関しての当時の宗教関係者の声としては、1667年、パリの大司教であったペレフィクスがその教区民に布告した教書¹³⁾、1669年、ジェジュイットの説教師ブルダルーによる『偽善に関する説教¹⁴⁾』がある。いずれも本物と偽物の外観が似ており、偽の信心を弾劾するという口実のもとに本物までも無差別に攻撃しているとの非難である。これは偉大なプレジューズたちの感情と相似的である。

(そ の 二)

ともあれ、モリエールが考えている信心の有り様をクレアントの台詞に拾っ

てみよう。そこでは、モリエールを敵視した「聖体秘蹟協会」¹⁵⁾など狂信家の徒党に対して、「心からの信者」の信心がどのようなものであるか、述べられている。

彼らの信心は、人間的で親しみの持てる信心です。彼らは私たちの行動をいちいち検閲するようなことは、決してしません。人を責めるなど傲慢だと思っているのです。言葉で高ぶるのは他人にまかせ、自らの行為によって私たちを叱ります。うわべの悪など、彼らにとって大したことはありません。それに、彼らの心は他人のことを善意に解釈する傾向にあるのです。彼らは、徒党を組んだりしませんし、陰謀をたくらんだりもしません。彼らの姿を見るに、注意深くよく生きようとしているのです。一人の罪人がいるとして、これを仮借なく責めようなどと決してしません。彼らにとって、罪を憎んで人を憎まずなのです。それに、行過ぎた熱心さで、神御自身が欲したまう以上に、神の擁護をしようなどと決してしません。¹⁶⁾

モリエールは、このように、心からの信者の信心は、「人間的で、親しみの持てる信心」*dévoition humaine et traitable*である、と述べている。*traitable* は現代仏語で *aimable*, *agréable* の意味を持っている。¹⁷⁾これは多分にユマニスト的発想である。モリエールは、ここに独善的で押しつけがましい「狂信家」や「偽善者」を諷刺しているのである。

モリエールが非難した「狂信家の徒党」¹⁸⁾として、すでに聖体秘蹟協会の名を挙げたが、これはジェジュイットである。初めモリエールの保護者でありながら、後に聖体秘蹟協会に入会、『ドン・ジュアン』上演に際して、『芝居および見世物に関する教父の意見』(1666)を書いて、演劇そのものを排撃するに至ったコンチ大公、『タルチェフ』上演禁止の裁決を下した高等法院長ラモワニオンといった人々がいる。これに対して、1665年、『石像の宴と題されたモリエールの喜劇に関する考察』を発表し、やはり『ドン・ジュアン』の中の不信心を攻撃したロシュモンなる人物は、ジャンセニストであり、高等法院の弁護士バルビエ・ドークールである、という。¹⁹⁾つまり、モリエールはジェジュイットとジャンセニストの双方を敵に回したわけである。

クレアントの主張は、その一端として信心生活と結びついた様々の道徳的規

範に対する問題提起を行なうものであるが、その意味でモリエールが喜劇『タルチュフ』をもって、ジェジュイットとジャンセニストのどちらを諷刺しているかについては、当時から議論があった。対立している両者は、互いに相手の方が諷刺されているものと認め合ったわけである。²⁰⁾

ジャンセニストであると考えられたのは、タルチュフがペルネル夫人やオルゴンに吹き込んだ厳格主義の教えのためである。実際のところは、『亭主学校』でスガナレルが唱える、または『女房学校』でアルノルフがアニェスに仕込むとするあの既婚女性の行動に関する厳格な規範は、ジェジュイットである聖体秘蹟協会の課す規範と一致する²¹⁾。ただ、一般にジェジュイットはジャンセニストと比べ、むしろ「寛容」であり、パスカルはその弛緩した妥協的な態度を攻撃しているほどである。モリエールもタルチュフの偽善振りをより良く観客に伝えるため、パスカルの論法を自作に取り入れている。すなわち、偽善者タルチュフがオルゴンの妻エルミールを口説く時用いる、「意図が純粹であれば、不義も許される」という理屈は、パスカルが「プロヴァンシアル」の中で、非難したジェジュイットの「意図の誘導」である²²⁾。

2. 自由思想家の間で

モリエールは、新しい思想の流れに位置する文学者の一人として、パスカルに共鳴する部分はあったと思われるが、その考えの全てを奉じているわけではない。それでいて、当時の進歩的な自由な思想の持ち主は、この場合ガッサンディ、ラ・モット・ル・ヴァイエなどモリエールの交際範囲の人々が多くいた「学者リベルタン」と呼ばれる人々だが、ポール・ロワイヤルのメッシュュー、隠士（ソリテール）に同情的であったのである。『十七世紀フランス文学史』を著したアダンは、次の様に述べている。

モリエールは、その当時のあらゆる自由な精神の持ち主（リベルタン）同様、ポール・ロワイヤルのメッシュューの高邁な精神、誠実さ、優れたフランス語に敬意を払っていた。そして、とりわけ権力者を前にしての勇気を尊敬していた。²³⁾

とはいえ、クライアントが求めているような人間的で、寛容な信心の有り様は、ジャンセニスムの厳格主義とは、やはり相容れないものである。医学批判に関しては、一貫してモンテーニュの懐疑思想の論法を取り入れているモリエールだが、社会的に勢力のあった宗教の問題については、その態度があいまいである。すなわち、ここに信心の在り方を論じるモリエール自身がキリスト教徒と言えるか否かの問題が生じてこよう。

先に、クライアントの台詞を引用し、そこに述べられている「人間的で、親しみの持てる信心」が多分にユマニスト的な発想である、と述べた。そもそも、モリエールが自らの代弁者に付与した性格もオネットムのそれであり、人間が自らの努力で完成された、理想的な人格に到達できるという人間本位の態度はユマニスムの影響を受けている。

ラ・ロシュフーコーは、真のオネットムと偽のオネットムの区別を行なっているが、オネットムとは、高潔であると同時に、人に「心地よさ」agrémentを感じさせるあらゆる特性を備えた人格である。モリエールは、この考え方を宗教の次元にまで押し上げたとは言えまいか。これに対して、十七世紀の宗教関係者は、信心に本物と偽物の区別を設けようとする事自体が理性で宗教を判断することであるとして、反撥しているのである。

実際、モリエールにとって、リベルタンの友人シャペルの周辺の人の手になったと推定される『べてん師なる喜劇に関する手紙』（1667）は、クライアントの立場を次の様に説明している。

宗教とは理性の完成されたものにすぎない、というのは確かなことである。少なくとも道徳にとってはそうである。理性が宗教を純化し、理性が宗教を育てる。そして、宗教がその存する場所で、原罪が扱めた闇を取りはらうだけだ、ということも確かなことである。²⁴⁾

このような理論的な考え方は、当時のリベルタンの間に顕著なものである。そして、それに対する反撥は、ユマニスムの影響を蒙りながら、それを乗り越えようとしたパスカルの「神を感じるのは心であって、理性ではない」とする態度に端的に表われている。カルヴェの意見も同様で、モリエールはキリスト教徒たろうとしたが、キリスト教徒たりえなかったのだ、と述べている。²⁵⁾

事実、当時の人々から殆ど無信仰とみなされたりベルタンの思想には、モリエールもずいぶんと影響を受けている。信心の在り方にユマニスト的傾向を持ち込んだ、という限りにおいては、モリエールにはリベルタンと同様の傾向がある、と言える。だが、相矛盾する思想をも有益であるとみれば、躊躇なく取り込んでゆく喜劇作家の態度は、一つの党派に偏るものではない。公衆の支持を前提とし、「規則に適った芝居が面白くないとすれば、規則の方が間違っている²⁶⁾」とするのは、健全な是々非々主義の考え方である。オルゴンがクレアントをなじる言葉に、「あんたの話には自由思想の臭いがする²⁷⁾」とあるが、ルイ十四世の宮廷で嫌われ、このように素朴な庶民感情からも、とうてい縁遠いものであった自由思想をもって、モリエールの宗教観に当てはめるのは、困難であろう。

3. キリスト教の中のユマニズム

しかしながら、人間の力を信じ、自己完成の理想を追ったオネットムの時代に、やはりキリスト教を人間化して生かそうとする動きがあった。それは十七世紀にあって、ルネサンス・ユマニズムの思潮と信心とを見事に融合させたユマニズム・デヴォ（敬虔なユマニズム）、あるいはキリスト教的ストア主義の人々である。その中心人物が1622年というモリエール生誕の年に世を去っている聖フランソワ・ド・サル（1567～1622）である。この節では、モリエールとフランソワ・ド・サルの思想の共通点のいくつかを、これまで論じてきたことと結びつけて指摘したい。

フランソワ・ド・サルは、当時広く読まれた『信心生活の入門』において、誰もが杓子定規に厳格な信心生活を送ろうとするのは信心の本義をはずれており、大きな誤まちである、と説いてある²⁸⁾。すなわち、在俗の人間が自らの社会的地位や職業などの要請する義務を放擲して、「観想的な修道院における修道士の信心²⁹⁾」を実行しようとするのは、むしろ異端である、と述べている。逆に言えば、キリスト教的完徳とはどんな世俗の活動でも実現されるものなのである。フランソワ・ド・サルによれば、己の本分に生きることがそのまま信心の生活につながるのである。

モリエールの『タルチュフ』に目を転じてみよう。これまで述べてきたこと

で、ペルネル夫人が考えているような信心が誤りであることはすでに理解されよう。ペルネル夫人の場合、信心を型にはまった厳格主義の枠組みで考えているからだ。そればかりでなく、彼女は、『人間ぎらい』のアルシノエのような元コケット、すなわち若さを失い、男たちが離れていった後、その弱点を糊塗するため、やむなく偽貞女（プリュード）となった婦人の偽善振り、狂信振りを手本にしようというのである。以下に掲げるのは、来客を嫌うペルネル夫人の言葉である。

あのお客、あの舞踏会、あの会話、みんな悪魔の生んだものです。³¹⁾

まさに、モリエールの敵たる聖体秘蹟協会は、その第一則として、舞踏会、贈り物、有閑侯爵が女性を口説くために閨房に通うことを禁じている。³²⁾これに対して、世俗の娯楽に対するフランソワ・ド・サルの見解は次の通りである。

遊びやダンスが許容されるためには、それが気晴らしのためであって、愛着からしてはいけません。わずかの時間に限り、疲れたり、ぼうっとなるほどしてはいけません。なぜならそれを習慣にしている人は、気晴らしを労役に変えてしまうでしょうから。³³⁾

すなわち、フランソワ・ド・サルにとってダンスそれ自体が有害なのではなく、それが行なわれる方法や程度が問題なのである。気晴らしは、むしろ彼の勤めているところである。同様に、会話について、フランソワ・ド・サルは、次の様に述べている。

会話を求めることと、それを避けることは、私が話しているような在俗の信心においては非難すべき両極端なのです。会話を避けることは隣人に対する尊大な態度であり、それを求めることは無為の徴（しるし）です。³⁴⁾

ここに現われている物事の両極端を避けようとする考え方は、モリエールがその代弁者にしばしば語らせている中庸の徳に通じるものである。例えば、『人間ぎらい』の中で、フィラントがアルセストに語る言葉に「完全なる理性はどんな極端をも避けるものだ」³⁵⁾とある。フランソワ・ド・サルは、ペルネル

夫人流に信心のために人を遠ざけ、社交を断つというのは行過ぎであり、キリスト教徒として他者を愛する道ではない、と教えている。

クレアントの言う「人間的で、親しみの持てる信心」とは、このようなものではなからうか。ジャック・シェレルは、信心に本物と偽物の区別を設ける態度をもって、合理主義的である、と指摘しているが³⁶⁾、そのことはユマニズムの影響を受けたりベルタンとの関係で理解されよう。そして、フランソワ・ド・サルもまた、ユマニズムの影響下にその著『信心生活の入門』の第一篇第一章を「真の信心」という標題で始めている。

4. 結 語

人間的で、親しみの持てる信心とは、オネットムたるべき努力をキリスト教的完徳に至る道に置き換えたものではなからうか。モリエールもまた、モラリストとして、ユマニズムの流れの中に身を置いているのである。とはいえ、これまで見てきたように、モリエールの立場は不偏不党であり、特定の思想に与するものではない。その点、モリエールは、何よりもまず一人の喜劇作家であった。悲劇などの純粋芸術とは異なり、社会の利害と密接に関わる喜劇の作家なのである。したがって、その態度は高踏的なものではなく、庶民感情に訴えかけるものである。そうした意味からも、モリエールは、良きキリスト教徒であろうとしたであろう。彼のごとく、実生活を通じて、人間の問題に悩み、その解決の方法を模索するのは、すぐれて人間を愛する心ではなからうか。町人階級（ブルジョワジー）出身のモリエールは、民衆の素朴な良識と宮廷の洗練された趣味を融合して、そこに自らのヒューマニズムの思想を築いたのである。

註

モリエールとフランソワ・ド・サルの関連について指摘した論文名を挙げておく。

Jacqueline PLANTIE ≪Molière et François de Sales≫. *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, 1972, pp. 902-927.

Janine KRAUSS, *Le DOM JUAN de Molière: une libération*, A. G. Nizet,

Paris, 1978,

フランソワ・ド・サルと社交界（honnêtetéの問題）については、田辺保著『パンセの原点をさぐる』新教出版社、1976、pp. 122~124.

- 1) *Le Tartuffe*, acte I, 5, p. 909, dans *Œuvres complètes de Molière*, éd. Georges COUTON, Bibl. de La Pléiade, Gallimard, 1976.
モリエールの引用は全てこの版による。
- 2) ≪pensées secrètes≫ Cf. Jean CALVET, *Molière est-il chrétien?*, Fernand Lanore, 1950, p. 72.
- 3) *La Critique de l'Ecole des Femmes*, scène IV, p. 661.
- 4) *Ibid*, p. 661.
- 5) *Ibid*, scène V, pp. 653-4.
- 6) *Préface des Précieuses ridicules*, p. 264.
- 7) *La Critique de l'Ecole des Femmes*, scène VI, p. 658.
- 8) CALVET, *op. cit.*, p.39.
- 9) *Ibid*. p. 39.
- 10) *Œuvres complètes de Molière*, éd. R. JOUANNY, Classique Garnier, 1979, p. 923.
- 11) BOSSUET, ≪Lettre au P. Caffaro≫, citée par Georges MONGREDIEN, *Recueil des textes et des documents du XVII^e siècle relatifs à Molière*, II, C. N. R. S., 1973, p. 676.
- 12) CALVET, *op. cit.*, p. 70.
- 13) L'archevêque de Paris, Hardouin de PEREFIXE, *Ordonnance d'interdiction*, 1667, *Œuvres complètes de Molière* I, éd. G. COUTON, pp. 1145-6.
- 14) Louis BOURDALOUE, *le Sermon sur l'hypocrisie*, cité par Herman Pains SALOMON, *Tartuffe devant l'opinion française*, Presses universitaires de France, 1962, p. 93.
- 15) ≪Confrérie du Saint Sacrement≫ Cf. Alfred SIMON, *Molière par lui-même*, Seuil, 1978, p. 87.
- 16) *Le Tartuffe*, acte I, 5, vv. 390-402, p. 910.

- 17) | *Dictionnaire du français classique*, Larousse, 1972.
- 18) «la cabale des dévots» Cf. SIMON, *op. cit.*, p. 87.
- 19) Cf. Léon LEJEALLE, *Dom Juan*, Nouveaux Classiques Larousse, 1971, p. 132. G. COUTON, *Œuvres complètes de Molière II*, pp. 1533–4.
- 20) Antoine ADAM, *Histoire de la littérature française au XVII^e siècle*, del Duca, 1974, t. III, p. 306.
- 21) CALVET, *op. cit.*, P. 42.
- 22) G. COUTON, *Œuvres complètes de Molière I*, pp. 1364–5.
- 23) ADAM, *op. cit.*, p. 306.
- 24) *Lettre sur la comédie de l'Imposteur*, in G. COUTON, *Œuvres complètes de Molière*, I, p. 1170.
- 25) CALVET, *op. cit.*, p.83.
- 26) *La Critique de l'Ecole des femmes*, scène VI, p. 663.
- 27) *Le Tartuffe*, acte I, 5, v. 314, p. 908.
- 28) Saint FRANÇOIS DE SALES, *Introduction à la Vie dévote*, Bibl. de la Pléiade, p. 37
- 29) *Ibid.* p. 37.
- 30) *Le Tartuffe*, acte I, 1, vv. 117–40, pp. 900–1.
- 31) *Ibid.* vv. 151–2, p. 901.
- 32) CALVET, *op. cit.*, p. 42.
- 33) FRANÇOIS DE SALES, *op. cit.*, p. 225.
- 34) *Ibid.* pp. 199–200.
- 35) *Le Misanthrope*, acte I, 1, v.151, p. 147.
- 36) Jacques SCHERER, *La Structure de Tartuffe*, 1974, p. 102.

(フランソワ・ド・サルの訳文については、戸塚文卿訳『聖フランシスコ・サレジオの信心生活の入門』中央出版社を参考にさせていただいた)